

<前回：トマス・アクィナス>

(1) 13世紀の時代状況

1. スコラの中世(文化総合)の時代:

- ・新しい修道院と大学、12世紀ルネサンス(イスラームからの広範な知の受容)
- ・異端的民衆運動

「アリストテレス」「トマスの世紀であるまさにこの十三世紀に、教育の中心としての修道院が解体され、大学とともにそこでの学問が登場した時、この異端の哲学者は画期的な作用を及ぼすことになった」(153)

「大学の法的立場は強固だった」、「大学は独立の団体として、皇帝や教皇の与えた特権にもとづいて」、「托鉢修道会」「説教修道会」、「この修道会は、異端者」「のスタイルで「説教」することによって、逆に異端に対抗し、また教会一般の説教に惨状に立ち向かおうとしていた」、「大学での堅実な研究に力を入れていた」(156)

「十二世紀ルネサンス」「アリストテレスの全体が受容されることによって可能になった」「ヨーロッパの知識人にとって巨大な知の拡大」「自然学、医学、人間論、形而上学の分野でははなはだしかった」「新しい普遍性への関心」(158)

「アルベルトゥス・マグヌス」(159)

(2) アリストテレスとスコラ哲学・神学

2. 理性の役割の強化: 諸権威と諸源泉の相互矛盾から真理へ、理性的な大学の神学。

- ・神学の理性的基盤を明確にする → 理性と信仰をめぐる知の総合
- ・階層的秩序、2階建て、下からと上からの循環構造

「信仰について、もはやただ従来に権威を引き合いに出すというだけではやっていけないのだ。聖書、教会教父、公会議、教皇たち——これらがしばしば互いに矛盾しているのだ。明瞭な答えにたどり着くためには、従来よりもずっと強く **Ratio** (理性) を、そして概念分析を用いざるを得ないのである」、「理性的な大学の精神」(162)

「「神一学」は大学教授トマスにとっても、司教アウグスティヌスにとっても別ではなかった。すなわちそれは、神について責任をもって語ることである。」(163)

「神学全体を開放する方向転換」「被造的なものへ」「理性的分析へ」「学問的研究へ」

「神学に徹底的に理性的基盤を得させるところの方法」(165)

- ・ゴシック的宇宙(文化世界) → ティリッヒの言う神律

3. 二つのスンマ

・「神認識のこの二重の可能性」「神についての真理のこの二つの認識方法」「哲学(哲学的な神認識を含む)と神学は、同じ神について語る以上切り離してはならないが」「異なる仕方でも神について語る以上区別されなければならない」、「哲学が理性的に「下から」、つまり創造と被造物から出発し、神学は信仰的に「上から」、つまり神から出発する」、「互いに支え合っている」(167)

- ・「二つの領域・二つの認識のレベル」「二階建ての建物」(167)

自然と恩寵「恩寵は自然を破壊せずこれを完成する」(*gratia naturam non tollit sed perficit*)

↓

諸階層の複合体

被造的コスモス／知のコスモス／大学・諸学問

4. 「イスラーム」「の敵対者との対決」「の中に自分がいると感じていたキリスト者のために」「護教的・宣教的・学問的な目的設定を伴ったキリスト教的確信の総合的展望」

「自然的理性のレベル」「理性にはすべての人間が賛同するように強いられる」(169)

「神学の「初心者」のため」「教会内的な教育的・学問的な目的設定を持つ手引書」

5. 「スコラ神学は一種の"sic-et-non-Theologie"であって、それはアベラールによってはじ

めて展開されたものなのである。」(ティリッヒ)

・アベラールの弁証法と「討論」の精神(正規討論、自由討論)

・問と項の区分(構造)

「吟味の精神」あるいは、論理連関と可能性の枚挙。

(3) アウグスティヌスとトマス

6. アウグスティヌスのパラダイムの内部での修正、プラトンに対するアリストテレス

7. 「アウグスティヌスのラテン的パラダイムを著しく修正した」が「それを解体はしなかった」「アウグスティヌス神学の支配に縛られたまま」(174)

「弱点を共有」

「アウグスティヌスの「心理学的」三位一体論の片寄り」「救済論の狭隘化」「原罪」「煉獄」「恩寵理解の物象化」

8. 「古代人の世界観への依存」(175)

「ギリシアの古代の世界観をほとんどそのまま受け取ってしまった」(176)

「聖書はコスモロジカルに理解され、コスモスは聖書的に理解されるということ」

→ ガリレオ問題

9. 「テストケースとしての女性の地位の問題」(178)

「トマスは女性についての知識を」「アリストテレスに依存していた」、「宿命的な「性別の形而上学」、「性別の神学」に生物学的基礎を提供した人だった」(181)

R=R・リューサー『性差別と神の語りかけ——フェミニスト神学の試み』新教出版社。

10. 「教皇制中心主義の偉大な、そして今日まで力のある弁護者になった」「宮廷神学者」(182)

11. 限界

「トマス・アクィナスがユダヤ教やイスラームの挑戦との生きた論争の中に立っていたということには何の疑問もない」(185)

「トマスの限界」「十字軍について一言」も語らなかったことである」「彼がイスラームについての非常に退化した知識しか持っていないということ」(186)

『神学大全』の仕事の中断」(188)

「まさにトマスこそ、自分自身の神理解の限界にも常に気づいていた人であった」(190)

12. 中世におけるキリスト教・ユダヤ教・イスラームの相互交流・相互寛容。

イベリア半島の輝き(→12世紀ルネサンス)

5. ルターとカント

「ルター訳聖書の意義」「高ドイツ語を、何世紀にもわたって通用するような書かれるドイツ語の媒体へと仕立て上げたからだ。ルターの翻訳には、文章体ドイツ語の最初のそして決定的な自己肯定が賭けられていたのである。偉大な「宗教改革者」であると同時にルターはそれ以降、作家、言語の創造者とも見なされるようになる。」(アントワーヌ・ベルマン『他者という試練——ロマン主義独逸の文化と翻訳』みすず書房、2008年、55頁)

ルターはその後のドイツ哲学にも決定的な影響を及ぼした。

「それはわれわれのヨーロッパ世界が二重の源泉から成立していることにもとづく対立、つまり予言者的・キリスト教的な宗教世界からと古代の精神文化からとに由来する根源的対立なのである」、「この二つの契機はそれがたがいに緊張関係に立っていることによつて」、「将来においてもわれわれの運命になるであろう。」(トレルチ

(1) ルターと宗教改革

1483: 誕生

- 1505：エルフルトの修道院へ
- 1512：神学博士の学位
- 1513：ヴィッテンベルク大学で第一回詩編講義
- 1515/16：『ドイツ神学』の断片発見、刊行。
- 1517：贖宥に関する95カ条の提題
- 1518：アウグスブルグでカエタヌスの尋問
- 1519：ライプツィヒ討論
- 1521：破門、ウォルムス帝国議会に登場、帝国追放。
- 1521/22：聖書の翻訳
- 1525：ドイツ農民戦争、結婚、エラスムスと絶交
- 1528：スイスの宗教改革者と論争
- 1530：アウグスブルク信仰告白、和議
- 1541：カルヴァン、ジュネーブで教会共和国の樹立
- 1546/47：シュマルカルデン戦争
- 1546：アイスレーベンで死去(2月18日)

0. 世界史的なパラダイム転換：それを準備したもの。

- ・東西教会の決裂、教皇庁の分裂、国民国家の勃興、
- ・貨幣経済の進展、印刷術の発明、
- ・贖宥状の販売(聖ペトロ教会新築のため)、
- ・教会に対する批判的機関としての大学、
- ・キリスト教会の腐敗、
- ・先鋭的な人文主義者の存在、
- ・民衆たちの間の迷信、農民たちの絶望的気分

1. 宗教改革の思想内容(三大スローガン)

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり(例えば、聖餐論争)、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。「信仰のみ」(信仰義認論)、「聖書のみ」、「万人司祭説」。これら三つのスローガンの内的連関。

2. 人間は何によって救われるのか?

- ・行為義認：人間は善行によって救われる。義人は救われる。何が善行であるかの内容は宗教において様々であるが(宗教儀礼に参加すること、隣人愛を实践すること、毎日祈り聖書を読むこと、献金を捧げることなどなど)、多くの宗教において、行為義認に類した考えは確認可能である。
- ・問題は、人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのかという点である。ルターは修道院で苦行を实践するが、救いを実感できず、精神的に追い詰められる中で、善行による救いについて根本的な懐疑に至る。贖宥状への疑問はこの文脈から出されたものである。

贖宥(いわゆる免罪符)の論理：天国/煉獄/地獄、聖人・教会・功德

- ・ルターは、最終的に、人間の救いは心からキリストの贖罪を信じること(心の純粹さ、内面性)によってのみ可能になるとの結論に到達する。これが、「信仰のみ」というスローガンで意味される信仰義認論である。このような罪と救いの理解は、パウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。 cf. 法然や親鸞の思想との比較。
- ・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論へ。(罪や恩寵の精神性・内面性)への転換といえる。信じる心の純粹さという個人の人格性が問われることになる。
- ・もはや、救いは教会制度において媒介されるのではなく、神と個人との関わり合いにおいて成立することとなり、またこの救いのあり方は、聖職者でも一般信徒でも変わり

ないことになる。ここに、「万人司祭」説が帰結する。人間は救いに関して、神の前に平等である。これは、イエスの宗教運動における徹底的な平等主義理論の具体化と解することも可能である。

- ・「信仰のみ」は救いが自己の信仰的決断の事柄であること、つまり自己決定の問題であることを意味する。そして、自己決定は情報公開が前提にされねばならない（宗教改革の精神はきわめて近代的である！）。この救いに関する知識の情報公開に対応するのが、「聖書のみ」のスローガンに他ならない。救いの知識は、権威ある他者から伝達されるのではなく、自分で聖書を読むことによってもたらされる。
- ・中世と近代の間：
中世との連続性（修道院におけるカトリック的敬虔、中世の神秘主義、アウグスティヌス神学、オッカム主義・後期中世の唯名論）
近代のシステムの精神的基盤の形成

<参考文献>

1. ルター 『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫。
2. A. E. マクグラス『宗教改革の思想』教文館。
3. 金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書。
4. 今井晋『ルター』（人類の知的遺産）講談社。
5. 金子晴勇・江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社。
6. 徳善義和『マルティン・ルター——ことばに生きた改革者』岩波新書。

(2) ルターとカント1 (1724-1804)

近代の宗教的な問い：近代以降の思想状況（啓蒙主義、近代科学、宗教批判、世俗化）において、宗教はなおも哲学的思索の対象であり得るか。宗教と近代的合理性との関係はいかなるものか。カント的答えは。

3. 波多野宗教哲学（『宗教哲学』（1935年）、『宗教哲学序論』（1940年）、『時と永遠』（1943年）の三部作における宗教哲学体系）における「ルターとカント」。

<波多野精一の宗教哲学プログラム>

- ・20世紀における宗教哲学の構築は、カントの批判哲学に依拠することによって可能になるとの確信（「正しき宗教哲学」）。波多野はドイツ留学時代にドイツ哲学界の主流であった新カント学派のカント解釈に依拠しつつも、カント自身の哲学に帰ることによって自らのカント解釈の確立を試みている。問われているのは、新カント派のカントではなく、カント自身。
- ・合理主義は、神を直接の理論的な認識対象とする哲学、その意味で、神の学である。伝統的な自然神学はこのカントの批判哲学により批判されることによって近代以降の知的状況においてその妥当性を失った。神の存在論証は論証ではなく人間における宗教的問いの表現である。
- ・宗教的体験とその積極的な意義を理解可能にするために、カントの批判哲学から実在論（高次の実在論）を構築するという課題。現代の思想的諸文脈で批判的実在論として模索されている理論構築に連なる試み。
- ・正しき宗教哲学は、神自体を理論論証の対象とする哲学ではなく、人間の事柄としての宗教、人間の生における宗教の可能性と現実性を論じる哲学。
- 4. カントは、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、その理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究する」（『時と永

遠 他八篇』岩波文庫、279頁)という批判主義の根本精神を、まず認識論において確立し、「次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった」。

5. カントはこの新しい宗教哲学を徹底した仕方で遂行したわけではなく、波多野宗教哲学は、ヴィンデルバントの「カントを理解することは彼を超越すること」という言葉の通り、カント批判哲学の宗教哲学における徹底化を目指している。

「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異って、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」(同書、280頁)。

6. 波多野宗教哲学：ルターとカント(体験と方法)

「宗教的体験の理論的回顧その反省的自己理解」と定式化された宗教哲学。

- ・『宗教哲学序論』の「第四章 歴史的瞥見」(『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫)。

「一 ルッテル」(109-115)：「宗教そのものの世界においてその田らしき自己理解へ、それ固有なる意味内容の自覚へ大いなる歩みを踏出した人」、「宗教固有の内的意味従ってその特異性と独立性」、「*sola fide*」(「信仰のみ」の教)」

「二 カント」(115-130)：

(3) カントとキリスト教思想

7. カント哲学がキリスト教思想に対してどのような位置を占めるかは、研究者によって大きく意見が別れる。カント哲学研究の分裂・分節状況。

・『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』『たんなる理性の限界内の宗教』(宗教論)のいずれを解釈の基点とするか。あるいは全体としてのカント。

8. 「神こそが全カント哲学の真の唯一の根源であるというように言うこともできるのではないだろうか。言いかえれば、全カント哲学を宗教哲学という視点から把えることもけっして不当ではないのではないだろうか」(量、16-17)。

シュヴァイツァーあるいは、ハイデッガー、ピヒト (Georg Picht, *Kants Religionsphilosophie*, Klett-Cotta, 1985.) のカント論。

カントと聖書の思惟との関係を論じる上で、宗教論(たんなる理性の限界内の宗教)が基本的なテキストとなる。

9. 「第一編 悪の原理が善の原理とならび住むことについて、あるいは人間本性のうちなる根元悪について」。カントはたんなる楽観主義的な啓蒙的な近代主義者ではない。

・「根元悪」：人間は生来悪である(悪の性癖(Hang))。

その起源は？ 「理性起源はあくまでも究めがたい」(57)

cf. 「アダムにおいてすべての人が罪を犯した」「時間的はじまりに関して見た悪の説明」

・人間の「根源的素質」は「善への素質(Anlage)なのである」。

↓

聖書的人間理解の伝統、神話的語り

神の像／墮罪(原罪)

10. 道徳律の意識は「理性の事実」であり、この事実性は善の理念の実践的な実在性を示している。しかし、道徳律による確証(定言命法としての形式性における道徳性)に加えて、その範例・例示をカントは認めている。

・イエス＝道徳的な理想としての一個の人格 → 道徳的主体としての自覚をもってイエスを模倣する。福音書読解の意義。

・神の国と教会＝イエス・キリストに合致しようとする人間の集団としての道徳的共同体
道徳哲学な見地から見た教会の純粋な理想像

<参考文献>

1. カント『たんなる理性の限界内の宗教』（全集 19）岩波書店。
2. ヘッフェ『インマヌエル・カント』法政大学出版局。
3. A・シュヴァイツァー『カントの宗教哲学』（著作集 15 巻 16 巻）白水社。
4. 量義治『宗教哲学としてのカント』勁草書房。
5. 氷見潔『カント哲学とキリスト教』近代文藝社。
6. 佐藤全弘『カント歴史哲学の研究』晃洋書房。
7. 芦名定道「ティリッヒとカントー近代キリスト教思想の文脈からー」、現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』第 10 号、2006 年、1-16 頁。

（４）ルターとカント 2

11. 南原繁『国家と宗教』（1942 年。「カトリシズムとプロテスタンティズム」1943 年→第三版・補論 1945 年）における「ルターとカント」
「カントにおいて人間は、必然の法則に従属する自然的存在者としての人間としてではなく、内面的な人格——道徳的法則に根拠する意志の自由な主体として、したがって、いかなる意味においても他律的ではない「自律性」において立てられたのである。これはルターの思想の継承、その哲学的形成と考えられる。なぜならば、ルターにあってはただ「神」に信頼し服従するところに自由が存したのであるが、カントにおいては実践理性の「義務」の法則を畏敬し遵守するときに自由が成り立つ。」(346)

↓

心の純粹さに根拠を有する人格的存在という人間理解において、ルターとカントは繋がっている。

12. 「ルターの宗教改革の問題をはらんだ帰結」
 - ・最初に存在していた宗教改革の感激は、間もなく燃えつきってしまった。
 - ・政治的抵抗勢力の強大化に直面。
 - ・プロテスタント陣営自体が統一を守りつづけることができなかった。
霊的熱狂主義、封建領主による教会支配
(ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち——パウロからカール・バルトまで』新教出版社)